石巻市

文化財だより

第19号

もくじ

仏像六躯が石巻市指定文化財に……1
仏像調査について……3
仏像調査報告解説……4
仏像調査報告……6
専称廃寺板碑調査報告……18
紙上文化財めぐり……40
平成元年度文化財めぐり……44
旧町名表示石柱設置事業……45
文化財標柱・説明板設置事業……46

石巻市教育委員会

仏像六躯が石巻市指定文化財に

石巻市教育委員会では、平成元年七月三一日付で、市内にある仏像六躯を石巻市指定文化財に指定しました。昭和六二、六三年度に実施した仏像調査にもとづいて行ったもので、これで石巻市指定文化財は全部で二二件となりました。

今回指定した文化財は次のとおりです。

銅造菩薩立像

所蔵者　洞源院
時　代　新羅統一時代（八世紀）
像　高　一二・四㌢
指定の理由
新羅統一時代の金銅仏で、頭頂から足先まで一鋳、内部は中空になっています。来歴は不明ですが、東北地方に存在する何体かの興味深い渡来仏の一つです。

銅造薬師如来立像

所蔵者　日野孝栄氏
時　代　鎌倉時代末期（一四世紀）
像　高　一〇・九五㌢

銅造阿弥陀如来立像

所蔵者　日野孝栄氏
時　代　鎌倉時代末期（一四世紀）
像　高　一二・一㌢

銅造観音菩薩立像

所蔵者　日野孝栄氏
時　代　鎌倉時代末期（一四世紀）
像　高　一二・一㌢
指定の理由
鎌倉時代末期の仏像で、いずれもムクの一鋳造で、台座背面に「高木」の刻印がある。この三尊は、同時期に造像されたこの地伝来の遺品で貴重なものです。

木造観音菩薩坐像

所蔵者　永巌寺
時　代　頭　部…平安時代末期（一二世紀）
　　体幹部…江戸時代
像　高　五二・八㌢
指定の理由
頭部は平安時代末期、体幹部は江戸時代の作で、いかにも和様の頭部は平安期の石巻にこのような観音像をまつる寺院があったことを想定させるものです。洞源院の新羅仏を除けば石巻最古のものと考えられています。

木造薬師如来坐像

所蔵者　長谷寺
時　代　桃山時代（永禄一一年（一五六八））
像　高　三〇・四㌢
指定の理由
桃山時代に京都で作られた仏像で、像底に「四条東洞院大仏師法眼覚教」が永禄一一年に造像した旨の墨書があり、桃山時代の仏師の動向を知るうえでの貴重な作例です。

◀銅造菩薩立像（洞源院）

▲木造観音菩薩坐像（永巌寺）

▲銅造阿弥陀如来立像　▲銅造観音菩薩立像　▲銅造薬師如来立像
（いずれも日野孝栄氏蔵）

▲木造薬師如来坐像（長谷寺）

仏像調査について

はじめに

日本において仏像は宗教的礼拝の対象物であるだけでなく、美術作品として鑑賞されてきた。そして、数多くの仏像が国宝や重要文化財に指定され、寺院やその信徒のみならず日本国民全員の財産として位置づけられ、保存・保護の施策がとられている。

しかし、石巻市内の各寺院等にある仏像については、文化財あるいは美術作品としての観点から網羅的な調査はこれまで行われたことはなかった。そこで石巻市教育委員会では、昭和六二・六三年度の二か年計画で市内の仏像調査を実施、その所在と文化財としての価値を確認し、保存・保護のための資料を得ることとした。

こころよく調査をお引き受けいただきました上原昭一東北大学文学部教授、調査に応じ貴重な仏像を拝見させてくださいました各所蔵者の皆様に心からお礼申し上げます。

Ⅰ　調査実施要項

調査対象　石巻市内に存する仏像
調査期間　昭和六三年一月～平成元年三月
調査担当者　東北大学文学部教授　上原昭一
東北大学文学部助手　長岡龍作
調査補助　東北大学文学部
東洋・日本美術史研究室
野口晃
久松由美子
小田島俊
五十嵐公一
朝賀浩
政次浩
大成栄
神田雅章

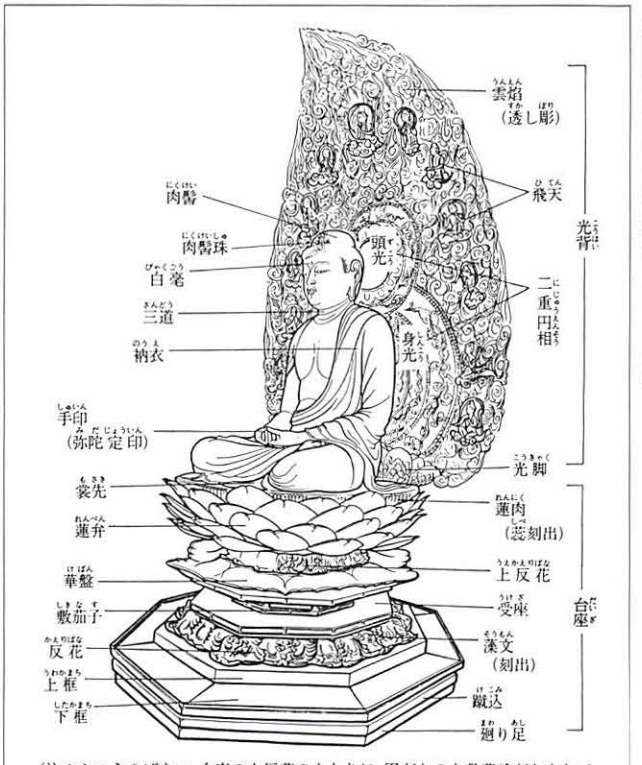
Ⅱ　調査の概要

市内の各寺院等の仏像について一点ずつ調査カードの作成と写真撮影を行い、重要と思われる仏像について考察を加えた。

Ⅲ　調査結果

四頁から一七頁に掲載。

▲調査風景



（注：ふつうのばあい、台座の上反花のかわりに、円がたの上敷茄子がおかれていることが多い。これに対して華盤の下の八角形の敷茄子を下敷茄子とよぶ。）

◀如来像の各部の名称

『仏像のみかた〈技法と表現〉』
倉田文作　第一法規　より

仏像調査報告解説

東北大学文学部教授　上原昭一

石巻市教育委員会からの委嘱をうけ、市全域にわたる文化財調査を、足かけ三年に及んでおこなった。

未知の地域への調査はいづこの場合でも、そうであるように、その土地の歴史が古ければ古いほどそれを伝えるなんらかの痕跡にふれることができ、その土地が伝え守ってきた文化遺産に出会えることへの期待がふくらむものである。

北上川の河口に位置する当地はその上流流域の岩手県側に数多くの文化財を伝えていることからみて、入口でもあり、またその流域の出口にもあたっていただけに、当然、流域文化との関係を証する遺品の伝存することが予想された。しかしながら、調査結果からみて、中、上流流域との関連を語る遺産と出会うことができなかったといわざるをえない。

現存遺品の大方は藩政以後の宗派と関連する江戸時代の作が占め、室町時代以前に遡る作例はきわめて少なかったということを申し上げざるをえない。その歴史的事情を語る場ではなく、また任でもないので、ここでは調査対象だけを採り上げ概観するにとどめたい。

石巻市の全域を歩いて、先づ気のついたことは河口に向かって北上川の左岸地区に室町時代以前の作品が点在していること、それに対し繁華街を構成する町中の右岸地区には江戸時代の作が集中しているという傾向が指摘されることである。

ことに左岸地区で特筆される遺品は仁田山の洞源院に伝えられる新羅統一時代の金銅菩薩立像である。寺伝では源義家の兜に載せた陣中守本尊との伝承があるようだが、それはともあれ、八世紀の朝鮮新羅作である。現状からみて土中鋳を伴うところ、いつの頃か定かではないが発掘されたことを語るもので、造像時より地上に伝世してきたものではない。なぜ新羅仏がこの地にあるのか、興味ある問題であるが、今後の課題となろう。

もちろんこの新羅仏は統一新羅の成立した七世紀中葉以降、八世紀末にかけて展開した作風の変遷からみると最末期に近く、あるいは高麗時代とする見解もあろうが、面長な面貌、胴のしぼり、腰部のふくらみなど新羅統一時代の作とみてよい。

東北地方には何体か、興味深い渡来仏がある。それらがどういう理由でこの地方に伝えられてきたか、はっきりしていない。この像もまたその点では同様にナゾを秘めている。

ところで、調査中なにかこの地固有の古い作品があってしかるべきだと期待していたところ、高木地区の日野孝栄氏が祀られている銅造薬師如来立像、阿弥陀如来立像、観音菩薩立像の三躯の鎌倉末期の金銅仏と出会うことができた。十一センチ前後のそれぞれムクの一鋳像で、ことに観音の台座背面に「高木」の刻銘があり、この三尊が同時期に造像されたこの地伝来の遺品であることが知られた。

鎌倉中期以降、鉄仏をふくめて再び金銅仏の時代になる。善光寺式三尊の全国的な普及と軌を一にして、別尊の小金銅仏も数多く造られ、さらに懸仏も盛行する。日野家蔵の小金銅仏もそうした時代の流れの中で、土型による一鋳像として造られたもので、最初から鍍金は施されていない。

この三躯の金銅仏に出会ったことから、なお多くの作例におめにかかれるのであろうという期待がたかまった。

しかし、鎌倉時代の作例とは残念ながら出会えなかった。ところが吉野町の多福院に秘仏として伝えられている木造大日如来坐像があった。五角型の宝冠を戴き、胎蔵界宝印の大日の形姿で、頭体幹部を前後矧ぎにし、膝前を別材で矧いだ寄木造りの坐像であるが、桐材を用いた作としては全国的にも珍しい作品であり、作風から南北朝時代とみてよいもので、この像こそ東北地方に平安以降強く長い教圏を築いてきた天台の造像活動のなかでつくられた像例であることを想定させるものであった。

一方、市街地の永巌寺には平安後期も院政期の作である観音坐像の頭部だけが

▲木造大日如来坐像（多福院）

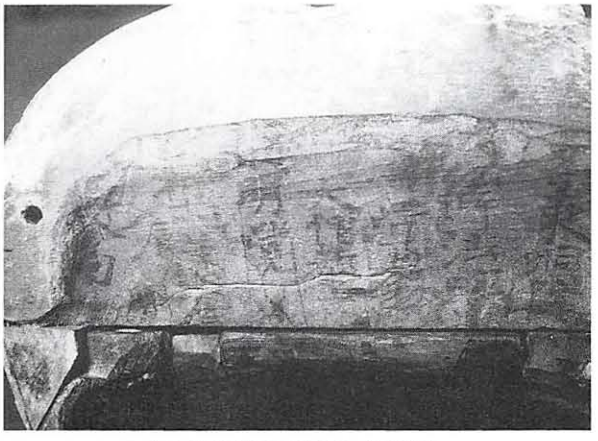
江戸時代に補作された体幹部に矧ぎ寄せられて伝わっていた。いかにも和様の目鼻立ちをもつこの頭部は、永巌寺本来の伝来かどうかは定かではないものの、平安期に石巻にこのような観音像を祀る寺院のあったことを知らせるもので、洞源院の新羅仏を除いては石巻最古の観音頭部ということができる。

調査の当初、もっとも古い像が残っていると考えられた真野の長谷寺では、木造十一面観音立像があり、それははっきり申して、作期のつかめぬ作品で、室町時代頃と想定するにとどめるほかなく、それよりも同寺の木造薬師如来坐像に注目された。像底に「四条東洞院大仏師法眼覚教」が永禄十一年（一五六八）に造立した旨の墨書があり、桃山時代の仏師の動向を知る上での貴重な作例である。

永禄在銘にみられるように、それ以降、石巻の諸寺に伝わる江戸期の諸作は総じて京都の仏師屋でつくられ、運ばれてきたものとみてよく、それらはただ石巻に限らず全国的な傾向であった。したがって個々の作例については解説をはぶき、報告書にゆだねることとする。

石巻全域にわたる調査の際にはその度ごとに教育委員会の方々にすっかりお世話になり、また、こころよく調査に御協力いただいたお寺の方々に謹んで感謝申しあげる次第であります。

▲木造観音菩薩坐像頭部（永巌寺）



▲木像薬師如来坐像底部（長谷寺）

▲高木刻印

石巻市仏像調査報告

調査員：東北大学文学部教授　上原昭一
東北大学文学部助手　長岡龍作

凡　　例

・報告は、原則として、寺院名、仏像名、仏像の時代・法量・形状・品質・構造について記載してある。記載内容に精粗があるが調査時に種々の都合でデータがとれなかっただけで他意はない。また、仏像には写真と対照できるように通し番号を付した。
・調査は、すべての仏像・寺院について行いえたわけではなく、また文化財・美術作品としての観点から行ったものであることを明記しておく。（石巻市教育委員会）

多福院　吉野町一丁目４－９

１．木造観音菩薩立像　　一躯　　室町時代

＜法量＞
総高135.3　像高128.7　面長14.4　面幅12.3　面奥17.1　胸奥14.8　腰張22.6　裾張24.6

＜形状＞
両手は屈臂して、左手は腹前で蓮華を持し、右手を胸前で蓮華に添える。天衣・条帛・裳を着し、蓮実上に直立する。

＜品質・構造＞
頂上髻から台座蓮実まで両手を含んで一木から木取りし、内刳りはない。木心は前方に外す。左肘の一部を欠失する。下肢背面に45.6×6.8㌢の浅い彫り込みがある。背面に大振りの手斧痕がある。

1

２．木造大日如来坐像　　一躯　　室町時代（南北朝）

＜法量＞
像高34.0　面長8.6　面幅7.0　面奥9.1　胸奥7.6　坐奥15.0　膝張23.4

＜形状＞
頭上五角形の宝冠を着し、法界定印を結び、右膝前にして結跏趺坐する。天衣・条帛を着け、腕釧を彫出する。

＜品質・構造＞
寄木造。頭上冠を含んで頭体幹部は耳後1.7㌢の線で前後に割り矧ぐ。両体側にそれぞれ一材を寄せる。膝前に横一材。体側地付き部に三角小材を寄せる。肩先から上膊まで別材、前膊部は体側材と、

2

両手先は体幹部材とそれぞれ共木につくる。

洞源院　渡波字仁田山２

３．銅造菩薩立像　　一躯　　新羅統一時代

＜法量＞

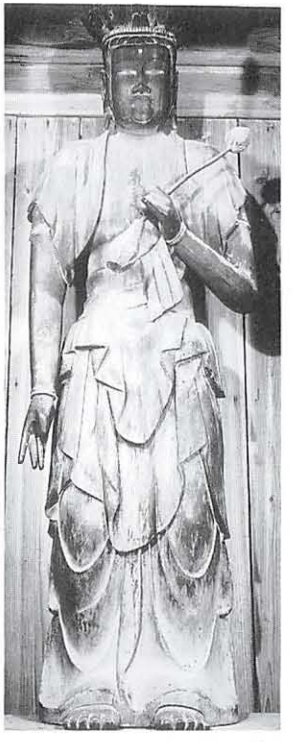
総高18.8（木製台座含む）　像高12.4　面長1.5　面幅1.6　面奥1.9　胸奥1.4（中央）　肘張3.5　胴張1.0　腰張2.8　天衣最大張3.9

＜形状＞

右手を屈臂し宝珠を持し、左手を垂下して立つ。天衣・条帛・裳を着す。垂髪は肩上の天衣に至り先端は三条に別れる。

＜品質・構造＞

頭頂より足先まで一鋳、内部を中空とする。後頭部、下半身背面及び像底に穴を穿ち中型土を抜く。頭・体部は貫通しない。足裏よりほぞを作り出し台座（後補）と接合する。背面（頭頂より3.4㌢下がる）にほぞを作り出す。ほぞ：基部幅0.4、厚0.2、出0.5、先端は欠失するか。



9

４．木造観音菩薩・不動明王・毘沙門天三尊　　三躯　　江戸時代

永巌寺　羽黒町一丁目１－27

５．木造観音菩薩坐像　　一躯　　頭部平安時代後期　体幹部江戸時代

＜法量＞

像高52.8　面長9.3　面幅9.0　面奥11.8（鼻先欠）

＜形状＞

右手は蓮華を持し、左手は施無畏印を示して、右足前で結跏趺坐する。頭部のみを当初とし体部は後補である。頭上に銅製の宝冠（後補）を着す。

＜品質・構造＞

三道第一段目より上部を当初とする。頭部は左耳中央及び右耳後1.5㌢を通る線で前後に割り離す。髻は共木より彫出。白毫相彫出。布下地として漆箔、金箔はすでに剝落する。鼻先・髻基部の一部を欠失する。

11

日野孝栄

６．銅造観音菩薩立像　　一躯　　鎌倉時代末期

＜法量＞

総高12.1　像高10.0　面長1.45　面奥1.55　面幅1.25　胸奥1.6　肘張3.2　天衣最大張3.4

＜形状＞

左手は左胸前で五指を捻じ（持物欠）、右手は胸前にあげ掌を左前方に向ける。天衣・条帛・裳を

着し蓮台上に直立する。背面は着衣等の表現を省略する。
<品質・構造>
頭頂より両手を含んで台座反花まで、むくの一鋳とする。鍍金の痕跡は認められない。台座背面に「高木」の刻銘がある。

7．銅造薬師如来立像　一躯　鎌倉時代末期

<法量>
総高10.95　像高9.45　面長1.4　面幅1.45　面奥1.7　胸奥1.55　肘張3.5　裾張2.45
<形状>
通肩の衲衣を着し両手を組み腹前にて薬壺を持し直立する。頭髪は肉髻基部を中心とする渦巻型をなす。背面の着衣表現は省略しない。
<品質・構造>
観音菩薩像に同じ

8．銅造阿弥陀如来立像　一躯　鎌倉時代末期

<法量>
総高11.1　像高9.45　面長1.25　面幅1.4　面奥1.8　胸奥1.35　肘張3.6　裾張2.3
<形状>
両手とも第一、二指を捻じ、右手をあげ左手を下げる来迎印を示す。通肩の衲衣を着け蓮台上に直立する。頭髪は肉髻基部を中心とする渦巻型とする（薬師如来に同じ）。背面の着衣表現は省略しない。
<品質・構造>
観音菩薩像に同じ

長谷寺　真野字萱原５

9．木造十一面観音立像　一躯　室町時代

<法量>
像高240.5　面長25.3　面幅18.3　面奥26.6　胸奥23.0（右）　腰張47.2　裾張56.2
<形状>
天衣・条帛・裳を着し左手は屈臂して蓮華を挿す水瓶を持し、右手は垂下して与願印とする。頭上には十二面を戴く。
<品質・構造>
体幹部を前後二材で寄せ、鉄製鎹によって接合する。両肩先右手全体と左手上膊部を別材で寄せ、木製鎹によって接合する。条帛垂下部、両足先は別材矧ぎ寄せ。白毫相水晶は後補。

12

13

14

10. 木造薬師如来坐像　一躯　桃山時代（永禄十一・1568年）

＜法量＞

像高30.4

＜形状＞

左手にて薬壺を持し右手を施無畏印として坐す。

＜品質・構造＞

体幹部は左右三材を寄せ、膝前に一材を寄せる。頭部は面矧ぎとし玉眼を嵌入する。両袖先は別材を矧ぎ寄せ、両手先は後補である。肉髻珠、白毫相に水晶に嵌入する。下口唇よりあご先を欠失する。

＜銘＞

像底に墨書銘がある。

「四条東洞院大仏師法眼覚教（花押）大僧都本□明覚・永禄十一辰□吉敬白」

15

11. 木造千手観音立像　一躯　江戸時代

＜法量＞

総高44.0　像高32.2

龍洞院

12. 木造地蔵菩薩半跏像（本尊）　一躯　江戸時代

＜形状＞

左手に宝珠、右手に錫杖を持し左足を踏み下げて半跏とする。

13. 木造地蔵菩薩坐像（本尊胎内仏）一躯　桃山時代

＜法量＞

像高31.4　面幅5.4　面奥6.5　胸奥7.1　坐奥14.7　肘張17.5　膝張25.5

＜形状＞

左手に宝珠右手に杖（後補）を持し結跏趺坐する。

＜品質・構造＞

体幹部は一木より造り、膝前に一材を寄せる。内刳りはない。右手先は別材を矧ぎ付ける。

14. 木造マリア観音立像　一躯　江戸時代

＜法量＞

像高31.2　面長5.6　面幅3.5　面奥6.5　胸奥5.2　袖張13.4　裾張9.5

＜形状＞

大袖の衣を着し、腹前で帯を結び先端を前方へ長く垂らす。胸前に幼児を抱く。

16

＜品質・構造＞
全体を一木から造り内刳りはない。彩色を施す。両手先、髻欠失。正面中央より左寄りに干割れがある。

真法寺
15. 木造釈迦如来坐像　一躯　江戸時代
＜法量＞
総高52.9　像高24.0

金蔵寺　南境字金沢104
16. 木造聖観音菩薩坐像　一躯　江戸時代
＜法量＞
総高93.0（光背を含む）　坐高41.5

17. 木造不動明王立像　一躯　江戸時代
＜法量＞
総高81.5　像高44.0

18. 木造毘沙門天立像　一躯　江戸時代
＜法量＞
総高71.8　像高44.8

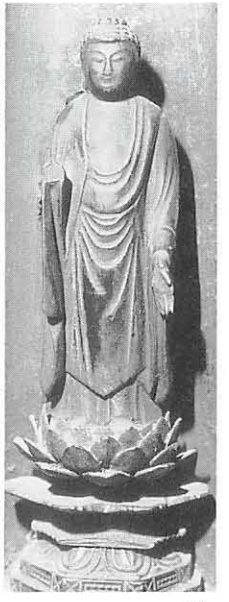
吉祥寺　高木字寺前50
19. 木造阿弥陀如来立像　一躯　江戸時代
＜法量＞
総高21.5　像高14.6

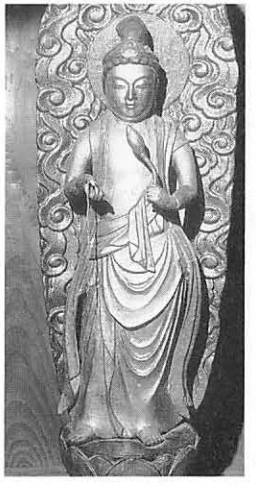
20. 木造観音菩薩立像　一躯　江戸時代
＜法量＞
総高68.2　像高50.8

無量寿庵（後藤家）　渡波町二丁目４－15
21. 木造阿弥陀如来坐像　一躯　江戸時代
＜法量＞
像高54.0　髪際高46.7　頂一顎18.7　面長12.2　面幅11.2

17

18


19


20

21

耳張13.5　耳朶張12.0　面奥13.6　胸奥（左）16.1　腹奥18.4　膝奥30.1　膝張46.0
膝高（右）8.7　（左）8.7
＜形状＞
偏袒右肩に衲衣を着し、腹前で弥陀定印を結び、右足前に結跏趺坐する。螺髪、肉髻珠、白毫相をあらわす。
＜品質・構造＞
体幹部は前後に二材を寄せる。両側に二材を寄せるが、このうち左側のものは肩まで続き、右側は腰部のみ。膝前に一材。頭部は割首とする。前身に漆箔を施す。肉身部はやや赤みがかる。像底には麻布を張る。

浄蓮寺　沼津字越田77

22. 木造阿弥陀如来立像　一躯　江戸時代

＜法量＞
像高61.1
＜形状＞
衲衣と偏衫を着し、来迎印を結んで直立する。

23. 木造如来形立像　一躯　江戸時代

＜法量＞
像高28.2　総高38.2　面奥5.7　袖奥7.7　蓮華座径11.2
＜形状＞
衲衣と偏衫を着し右手を挙げ左手を屈臂して直立する。
＜品質・構造＞
台座を含んで一木から造る。内刳りはない。肉身部には金箔を施す。他は漆塗りとする。裏面に墨書がある。右手先は欠失、左手先の一部を欠失。

洞仙寺　桃浦字寺下6

24. 木造如来坐像　一躯　江戸時代

＜法量＞
像高36.0　髪際高31.5　頂一顎12.4　面長7.4　面幅7.5　面奥9.8　胸奥11.2腹奥12.6（衣含む）坐奥21.7　肘張21.6　膝張30.0　膝高（左）6.0（右）5.7
＜形状＞
衲衣を偏袒右肩に纏い、右足前に結跏趺坐する。左手は足上で仰掌とし、右手は屈臂し腹前で左手に添える。

22

24

23

25

＜品質・構造＞

膝前に一材を寄せる。右肩、左手首で矧ぐ。他の構造の詳細は不明。玉眼とする。白毫は木製。肉身に漆箔を施し、着衣は金泥描きの文様（雷文繋ぎ、卍繋ぎ、蓮華唐草、四菱入り七宝繋ぎ）を表す。肉髻珠、裳裾先を欠失する。両耳の一部を損する。

25. 木造地蔵菩薩立像　　一躯　　江戸時代

＜法量＞

像高46.7　面長8.7　面幅5.6　耳張6.5　耳朶張5.7　面奥6.6　袖張14.1　裾張11.2

足先開（内）2.8　（外）6.5

＜形状＞

右手は下げ錫杖を握り、左手は屈臂し仰掌として宝珠を執る。内衣、偏衫、衲衣、掌を着し直立する。

＜品質・構造＞

構造の詳細は不明。袖垂下部は別材を寄せる。肉身部は金泥彩、着衣部は金泥上に彩色（朱、白、墨、群青、緑青）を施す。裳、衲衣の地紋に針様のものでひっかいたような細線の文様を使う。

峰耕寺　折浜字風越13

26. 木造大日如来坐像　　一躯　　江戸時代

＜法量＞

像高32.0　髪際高26.7　耳張6.3　面奥7.2　胸奥7.5　腹奥8.4　坐奥11.3　膝張20.0

＜形状＞

条帛、裳を着け、宝冠をかぶり、腹前で定印を結び、左足前に結跏趺坐する。地髪は前方はまばら彫、後方は刻ます背面に長く垂らす。

＜品質・構造＞

体幹部を一木とし、両肩、両前膊半ばで矧ぐ。定印を結ぶ両手先は一木。膝前、両腰脇をそれぞれ寄せる。内刳りはない。宝冠内部はすり鉢状にくり込む。白土地に漆箔を施す。

右腰後方に紙を貼って剝がれた痕がある。補修によるものか。膝前を大きく欠損する。両前膊半ばの内側と鼻先に欠損がある。

長林寺　水明南二丁目12－8

27. 木造聖観音坐像　　一躯　　江戸時代

＜法量＞

像高27.7　髪際高19.9　耳張5.8　面奥6.5　胸奥7.2　腹奥8.0　坐奥15.3　膝張18.1

＜形状＞

両手を屈臂し、左手は水瓶を執り、右手は仰掌とする。銅製の頭飾を着け、天衣、条帛、裳を着し

26

27

28

て、右足前に結跏趺坐する。
<品質・構造>
髻を含んで頭体部を一木から造る。内刳りはない。胸に穴を埋めた痕があり、装身具を留めるためのものと思われる。白毫は木製埋め込み。
両肩先、膝前、銅板製の頭飾は後補。鼻先は小鼻半ばより先に後世の補修による別材を接着する。全身に白土地上の補彩痕が見られる。頭部髻基部の背面を折損する。

寿福寺　羽黒町

28. 木造薬師如来坐像　　一躯　　江戸時代

<法量>
像高45.6
<形状>
偏衫の上に衲衣を偏袒右肩に纏い、両手を屈臂して、右手は前方を向け、左手は仰掌として薬壺を持す。左足前に結跏趺坐する。
<品質・構造>
体幹部を上下二材に組み合わせ内刳りはない。玉眼。肉身部を金泥彩を施す。

零羊崎神社　湊字牧山１－１

29. 木造坂上田村麻呂坐像　　一躯　　当初部は室町時代か。

<法量>
像高50.0　胸奥15.8　腹奥24.5　坐奥40.4　肘張35.6　袖張61.6
<形状>
烏帽子をかぶり、袍、袴を着す。右手に扇を持し、左腰に剣を差す。両足裏をあわせて坐す。
<品質・構造>
体幹部は八材を寄せ、さらに、両体側部、膝前に材を寄せる。内刳りはない。頭部のすべてと両手先は後補。全身に後世の泥絵の具をかぶる。

30. 木造悪玉御前坐像　　一躯　　室町時代

<法量>
像高27.3　頂一顎9.8　面幅5.6　耳張8.1　面奥9.0　胸奥10.5　坐奥20.6　肘張19.9　袖張25.1
<形状>
筒袖の内衣の上に大袖の衣を着し、合掌して正坐する。
<品質・構造>
頭体部は一木から成る。像底と背面から内刳りを施し、背板を当てる。背板は頭部にまで至る。膝

29

31

30

前に一材を寄せる。頭部内中空部に一材を入れる。背板、膝前材、頭部内の一材は後補。鼻先、合掌する手先を欠損する。

本木家　大瓜字八津山

31. 木造如来形残欠　　一躯　　室町時代

＜法量＞

像高60.0　頂一顎19.2　面長14.1　耳張11.9　面奥14.2　最大奥（袖先一背面）12.0　肘張（最大幅）27.1

＜形状＞

通肩の衲衣を着け両手を屈臂する坐形。

＜品質・構造＞

一木造り。内刳りを施す。螺髪は刻みだす。白毫のための穴を穿つ。体部後半材、膝前材、白毫を欠失する。

高橋精一

32. 木造文殊騎獅像　　一躯　　室町時代

＜法量＞

総高29.8（獅子を含む）　像高20.3

＜形状＞

天衣、条帛を着け、左手を屈臂して坐す。右足は左足上にはのせない。獅子坐に乗る。

＜品質・構造＞

文殊菩薩は体幹部根幹材を一木とし、左腰脇に三角材、右脇後方に小材を寄せる。両肩先を矧ぎ付けとし、左手前膊部で矧ぐ。右足先別材矧ぎ付け。玉眼。獅子坐は一木より成る。漆塗り（赤色を呈す）。獅子頭部、文殊菩薩着衣部、左足部を別材で矧ぎ付ける。後方中央に光背のための穴を設ける。右肩先を欠失する。

＜時代＞

獅子裏面に「享禄三年建立」の刻銘がある。1530年（室町時代）

松盛院　田代浜大泊55

33. 木造聖観音坐像　　一躯　　江戸時代

＜法量＞

坐高31.8　髪際高22.4　頂一顎15.8　面長6.7　面幅6.4　耳張8.3　耳朶張7.8　面奥8.5　坐奥22.3　肩張14.9　肘張19.3　膝張22.5　膝高（右）54.9（左）5.1

＜形状＞

偏衫を着し、その上に偏袒右肩に衲衣を纏う。両手を屈臂し、右手は衣端を握り、左手は第１、３指

32

33

34

を捻じて腹前に挙げる。右足前に結跏趺坐する。髻を造り、その前方に化仏を配する。
<品質・構造>
体幹部は前後二材とし体側部は左側で二材、右側で一材とする。膝前に一材を寄せ、体幹部材と膝前材の間に一材を挟む。膝前材は低部を浅く彫り込む。膝前材と中間材の接合は、差しとする。髻、両手先は別材矧ぎ付けとする。
全身に後補の漆塗りを施す。彩色は後補。化仏、天冠台、白毫を金色とし、口唇、光背に朱色を施す。
<備考>
胎内に寄進者名を墨書する。

普誓寺　門脇字中浦15

34. 木造大日如来坐像　　一躯　　江戸時代

<法量>
像高19.1
<形状>
条帛、裳を着け、宝冠をかぶり、腹前で智拳印を結んで、右足前に結跏趺坐する。
<品質・構造>
体部根幹材は前後二材とし、両腰脇に三角材を寄せる。膝前に一材を寄せる。宝冠は銅製鍍金透彫。白毫は水晶。頭髪に墨色を施す。根幹材のみ当初のものと見做される。

広済寺　住吉町２－４－46

35. 木造菩薩坐像　　一躯　　江戸時代

<法量>
像高65.8
<形状>
髻を結い、天衣、条帛、掌を着し、合掌して坐す。頭部正面には銅製透し彫の冠飾を付ける。
<品質・構造>
体幹部は前後二材とし、地付きまで至る。その周囲を複数の材で囲み下肢を形成する。銅製の冠飾を付ける。天衣、条帛等は別材矧ぎ付けとする。右肩先が脱落している。

寿福寺　羽黒町１－４－19

36. 木造弁財天坐像　　一躯　　江戸時代以降

<法量>
像高29.5

35

36

37

梅渓寺　湊字牧山８

37. 木造聖観音立像　一躯　江戸時代以降

<法量>

総高　42.8　像高30.5

西光寺　門脇町２－５－７

38. 木造阿弥陀如来坐像　一躯　江戸時代以降

<法量>

像高88.3

吉祥寺　牧浜字アチヤ浜４

39. 木造観音菩薩坐像　一躯　江戸時代以降

<法量>

像高37.0

慈恩院　吉野町１－３－15

40. 木造阿弥陀如来坐像　一躯　江戸時代以降

<法量>

総高75.0　像高27.6

41. 木造毘沙門天立像　一躯　江戸時代

<法量>

総高107.3

称法寺　門脇町３－７－４

42. 木造阿弥陀如来立像　一躯　江戸時代以降

<法量>

像高62.8

広済寺　住吉町２－４－46

43. 木造釈迦如来坐像　一躯　江戸時代以降

<法量>

総高167.4　像高51.2

38

39

40

41

42

43

松盛院　田代浜字大泊55

44. 木造地蔵菩薩半跏像　一躯　江戸時代以降

<法量>

総高35.7

満福寺　田代浜字仁斗田

45. 木造釈迦如来坐像　一躯　江戸時代以降

<法量>

総高17.6

46. 木造右脇侍像　一躯　江戸時代以降

<法量>

総高24.3　像高11.7

44

45

46

専称廃寺板碑調査報告

石巻市文化財保護委員　佐藤雄一

調査期間
昭和六二年七月二四日～二六日
調査員
佐藤雄一（宮城県石巻高等学校）
調査補助員
鴨原由起子　中村留美（石巻市立女子）
繁田恵美　高松美貴子　商業高等学校）

1、鹿妻山専称廃寺の位置

石巻市鹿妻の鹿妻山の南麓にあたり、現在は菅原神社となっている。専称廃寺の板碑とされる名号板碑群は、この裏手に整理保存されている。

2、鹿妻山専称寺縁起

鹿妻山専称寺の縁起については、仙台市在住の葛西正人氏所有①の文書をよりどころとした『石巻市史』第二巻（第八篇　宗教　第三章　廃寺の址蹟）の記述が定説化しているようである。すなわち次のような記述である。

鹿妻山専称寺・登米郡寺池村②鹿妻山専称寺（時宗）は相州藤沢山清浄光寺の末寺の跡也。建武元年遊行上人の後安国上人の開基也。上人は葛西家の子也、七歳の時関東にて狐の為に城中より引出されしを尋ね、遊行二代伝詞上人③巡国の砌弟子となし、狐上人と世に唱えられしはこれなり。有徳堅国にして、遊行五代を相続す。然るところ葛西当国牡鹿郡日和山に取り移り在城の後、上人縁を以て湊村の内鹿妻に於て専称寺を建立して七十石を寄付す。守本尊行基作の阿弥陀如来を納むその後当村へ在城刻、供養寺なり、没後以後退転及廃寺同然の所、遊行四十九代一法上人正徳二年修行の砌相尋宗門にて奥州の古跡也。況や景色新たなるを思ひ八景の和歌読残す。

この記述によると専称寺は遊行五代安国上人の開墓にかかり、葛西氏の供養寺であったとするのである。しかし、仙台葛西氏文書が信ぴょう性の高い史料として採用されてよいものかどうかの疑問が残るのである。

疑問の第1点は遊行五代安国上人が本当に葛西氏の出身であるのだろうかということであり、第2点は『石巻市史』の引用文献中にある

～（前略）遊行四十九代一法上人正徳二年修（遊か）行の砌相尋宗門にて奥州の古跡也～

という記述が果たして真実かどうかという点である。

第1点の安国上人の出自については「遊行・藤沢両上人歴代系譜」④によると

遊行五代
藤沢二代　安国上人

生国相州澁谷（師阿と號す、三代阿智得の弟子）、人皇九十五代後醍醐天皇即位七年正中乙丑歳正月十一日於武州芝宇宿四十七賦算、遊行三年、嘉暦二丁丑歸入藤澤山独住十一年、延元二丁丑十二月三日於藤澤山五十九入滅

とあり、相模国澁谷を生国としている。この史料は藤沢清浄光寺蔵（天保十一年成）澄学編の「遊行・藤沢両御歴代系譜」を底本として翻刻されたものであるので、史料としての信ぴょう性は高いものと判断される。しかし、これとても、今井雅晴氏の指摘されているように、史実として確認できるわけではないという弱点はあるのである。

疑問の第2点については、「遊行日鑑・第一巻」正徳二年の項に

正徳二年十一月三日寺崎登米専称寺暮六半御着・・・十一月九日戸米とよま専称寺御立、七半晨朝明御発馬

とあり、登米専称寺には六泊七日の滞在記録はあるが、そこから直接、石巻の専称廃寺跡に立寄ったという記述はない。

これら二つの疑問点からして、『石巻市史』所収の鹿妻山専称廃寺にかかわる記述は、一応保留されねばならないものであると思う。

鹿妻山専称廃寺の開基を遊行五代安国上人とすることについて、今井雅晴氏は『中世社会と時宗の研究』の中で次のように論ぜられている。

すなわち、安国上人の出身については、相州澁谷とする他に二説あり、第一は大崎氏出身説であり、第二は葛西氏出身説であるという。その第一の大崎氏出身説は、仙台市真福寺（時宗）の安永四年（一七七五）の年紀のある版木本⑤が示す説で、奥州の豪族大崎太膳太夫義孝の息男という説である。この縁起によれば、安国上人は弘安元年（一二七八）春の誕生、陸奥の領主大崎太膳太夫義孝の嫡男であって、三歳の時まで狐に育てられたとする。しかし、大崎氏は足利氏の一族斯波氏の支族であり、鎌倉後期に足利家氏が奥州斯波郡に下って斯波を称したのをその始めとしている。家氏の曾孫高経の弟は南北朝中期の文和三年（一三五四）、尊氏によって奥州探題に任ぜられ、奥州国府に下向した。この奥州探題家が下総の大崎荘をも領有していた関係で大崎氏を名のることになったのである。とすれば、「開山安国上人略縁起」にいうところの弘安元年（一二七八）における「当国前領主大崎大膳太夫義孝」の存在はあり得ないということになるという。よっ

て安国上人大崎氏出身説は、成立しないことになる。

第二の葛西氏出身説は、前にも一部論じたように、大崎氏出身説と同様、確実な史料で確認することができるわけではない。しかも、『石巻市史』所収の安国上人真教師事説は、真教遊行上人となってからは奥州に下向していないので、「遊行二代佗詞上人巡国の砌弟子となし」という記述は、安国上人の相州渋谷出身説、大崎氏出身説よりも信ぴょう性が低いといわなければならないという。

したがって、鹿妻山専称寺縁起については、たしかな文献が確認できないということになるのである。

しかし、現実に専称廃寺跡と推定される鹿妻菅原神社（天満宮）の地に多数の名号板碑があり、その中に専称寺住職の刻名が存在するのである。いったい専称寺は誰によっていかなる情況の下で開かれたのであろうか。本当に葛西氏の供養寺あるいは菩提寺であったのであろうか。葛西氏と時宗とのかかわりをどんなことで確認できるだろうか。今後の課題であろう。

3、六字名号の書体について

時宗板碑の特徴を表すものに、碑面中央に刻されている「南無阿弥陀仏」の六字名号がある。この名号の原初書体については服部清道氏の「時宗名号の原初書体」[6]にくわしいが、服部氏は時宗名号の書体を真・草二様に大別することができるとしている。これは現存する歴代遊行上人の遺墨による分別であるが、伝承と相承を重視する仏教界においては、歴代遊行上人の書体は、そのまま一宗の書体を象徴されるものと理解されるとしている。その上で、時宗における真書体名号は、その定形を遊行上人賦算の名号札に見られ、草書体名号は宗祖一遍の自画自賛像にみられるとされる。そして、真書体名号の書体を遊行上人賦算の名号札と重ねあわせることによってする傍証として、清浄光寺梵鐘銘文〔延文元年（一三五六）七月五日〕、清浄光寺域内藤沢敵御方供養塔銘文〔応永二五年（一四八四）十月六日〕、他二基の板碑」をあげておられる。

延文元(1336)年
清浄光寺梵鐘銘

（横浜商大論集14—2より）

応永25(1418)年
藤沢敵御方
供養塔銘

草書体名号の源流は一遍自画自賛とされるが、それには二様が伝えられているという。すなわち、その一は、一遍自画自賛像と伝えられる一幅にあるもので、一遍は左向きに念珠合掌、称名念仏する姿で描かれ、眼前に草書体名号一誦を書いているものである。

しかし、服部氏は市内の捨聖であることを自覚し、一人の弟子も欲せず、「我が化尊は一期ばかりそ」と宣し、一所不住、最後は化益十余年を南無阿弥陀仏につくし去った一遍に自画自賛像の存在そのものが不合理であるとされており、この草書体名号の原初書体とはなしがたいとされている。

（伝一遍上大自画自賛像）
（横浜商大論集14－2より）

草書体名号のその二は、一遍肖像画（清浄光寺蔵）にあるもので、一遍は右向き跣足で、胸上に念珠合掌し、名号に向かって称名念仏する姿で立っている構図である。

服部氏は、この二様の構図については、前者の一遍の相貌は一遍聖絵に酷似し、後者は一遍聖上人絵詞伝に画かれた上人像に酷似しているとされる。しかし、これら二様の草書体名号は、聖絵・絵詞伝の成立に検討を加えることによって、すくなくとも、二祖真教時代には真教自らは草書体を筆にしながら、それを名号の書体として表現することはなかったとされ、草書体名号が板碑の面に信仰標幟として顕われたのは、真教以後、数代経った南北朝時代のことであるとされている。

以上のような時宗名号書体に関する服部氏の論をもとにして、鹿妻山専称廃寺跡の時宗板碑群に現れた名号書体を検討することにする。

専称廃寺板碑群の最古のものはNo.2建武四年（元弘元年と併記）銘の□阿弥陀仏、西阿弥陀仏の銘記のあるもので[7]、「阿弥陀仏」の「弥」の弓偏が半円形に近い書き方であるが、真書体に近いものであり、一年後の紀年銘でNo.3の暦応元年（一三三八）の志阿弥陀碑は明らかに真書体である。第三番目に古い碑はNo.4の一阿弥陀碑であり、中央名号の第四字「弥」の弓偏は明らかに半円形に書かれており、草書体名号である。服部氏の指摘のように、石巻地方においても草書体名号が使われるのは南北朝時代に入ってからであることを確認することができる。

以後、専称廃寺跡板碑群における名号書体の表れかたは、真草両書体に特に目立った特徴は見られないが、No.17の永徳三年（一三八三）の貞阿弥陀の草書体名号から永亨二年（一四三〇）の□阿弥陀仏の草書体名号にいたる一一基のうち八基までが草書体名号であるのは、この時期は草書体名号が主流であったのではなかろうか。

いずれにしても、専称廃寺跡板碑群に時宗特有の草書体名号板碑があることは専称廃寺が時宗であることを裏づける有力な手掛かりをあたえてくれることになるのである。

専称廃寺が時宗であることは、独特の草名体名号板碑の存在によってほぼ動かしがたいところであるが、これが葛西氏の供養寺であるかどうかの解明はここにある名号板碑群からは引き出すことができない。これからの研究に期待したいものである。

5．専称廃寺の創建年代について

鹿妻山専称寺は葛西氏の菩提寺であるといういいつたえがある。しかし、それは専称寺縁起において考察したように、

安国上人を葛西氏の出身とするには無理があるようで、さらに『石巻市史』に使われた史料が、根本的に史料的価値がとぼしいということになったので、専称寺の葛西氏菩提寺説は改めて別の観点から考察しなければならないことになると思われる。

鹿妻山専称寺の縁起については、藤沢市の清浄光寺にも何ら史料となる記述はなく、石巻から登米に移って現存する鹿妻山専称寺にもまったく記録はない。したがって、今のところ鹿妻山専称寺をさぐる手だては、廃寺跡である現在の菅原神社境内に整理されている板碑を手掛りにする以外に方法はないように思われる。

まず、専称廃寺板碑群の中から、葛西氏に関係するだろうと推測されるものをさぐってみると、次の二基になる。

⑰至徳元年九月十日　蓮阿弥陀仏
　　五七日

㉑応永三年九月六日　蓮阿弥陀仏

である。この二基の名号書体は真書体であり、この二基に共通する「蓮阿弥陀仏」は、葛西氏七代良清は蓮阿の諡名をうけていることから、良清の供養碑と考えたいところであるが⑰は五七日の供養碑であるので、この碑の被葬者は、八月五日ごろに死去したものと推測される。しかし、七代良清は興国四年（一三三九）七月十三日、あるいは貞治四年（一三六五）四月七日の没年とされるので年代的には適合しないのである。

このように、「蓮阿弥陀仏」を葛西氏と結びつけることはこれからだけでは無理のように思われる。よって鹿妻山専称寺と葛西氏とのかかわりは現在のところ不明としておくより仕方がないのではなかろうか。今後は、葛西氏という中世武士団の一氏族に限って考察するのではなく、ひろく中世武士団と時宗とのかかわり、特に時衆の陣僧としての活躍などを考察の視野に入れて、考察がなされる必要があると思われる。

それでは鹿妻山専称廃寺はいつごろの創建になるのであろうか。葛西氏とのかかわりを一応はなれて検討してみることにする。専称廃寺の創建の時期を推測させる板碑が

No.5貞治五年十一月十二日　専称寺二代

の碑である。この板碑を専称寺二代の供養碑と考えれば、この時期に、すでに専称廃寺は創建されていたことになるし、ここにある阿弥陀仏号をもつ板碑を専称廃寺ゆかりの碑と考えれば、No.2の建武四年（一三三七）を一つの目安と考えて差しつかえなさそうである。建武四年と併記されている元弘元年（一三三一）までさかのぼれるとしたいところであるが、この年が直接、専称廃寺の創建とかかわりがあるかもしれないが、そうでないとかんがえることもできるので、一応、専称廃寺の創建を建武四年以前としておきたい。いずれにしても南北朝初期か、さかのぼっても鎌倉末期といったところであると推察される。

6．文鬼元年碑について

「文鬼」という年号は朝廷の定めた公年号の中にはないものである。いわゆる私年号⑧あるいは偽年号、異年号、逸年号などといわれるものであろう。

「文鬼」を「ぶんき」と読むとすれば「文亀」に（一五〇一～一五〇三）に一番近い年号となりそうであるが、専称廃寺跡板碑群の下限年代の判明しているのが永享二年（一四三〇）であるので、ほぼ七〇年間の開きがある。「文亀」に比定するのは無理のような気がする。それでは「南無阿弥陀仏」の六字名号の書体が専称廃寺跡板碑群の他の名号書体と共通性はないだろうか。これとても文鬼元年碑の名号書体は専称廃寺跡の他の年紀が明白な名号板碑の書体とは微妙に違っていて、これから「文鬼」の年代に迫ることもなかなかむずかしいことである。

私年号はこれまで四十例以上知られているといわれるが、一例だけでしか知られていないものもあるというから、「文鬼」もその例なのであろう。「亀」は「鬼」に通じないとすれば、「文鬼」の年号の意味するところはどんなことなのだろう。私年号に用いられる字は「大」、「福」、「喜」、「寿」といっためでたい字が選ばれることが多いとされる。「亀」のめでたさはわかるような気がするが、「鬼」とはどうしたことだろう。

7．保存について

専称廃寺跡の時宗板碑群は、専称寺縁起について、まだ不確かなところがあるにしても、石巻と葛西氏との直接的な関係を示す史料が極端に少ない現状から、より一層の保存の手だてを講ずる必要があるだろう。

現在、この板碑群は菅原神社の裏手に地区の篤志家の好意によって、一応、保存の手だては講ぜられている。しかし、一部は簡単に移動可能な状況になっている。したがって、菅原神社左手の空地はきれいに整地されており、板碑群保存にも適当な広さもあるので、現在の場所から神社左側に移動して、散逸を防ぐための処置を施すことが望ましいと思う。

註

①江戸時代の文書である。

②鹿妻山専称寺が登米郡寺池村所在となっているのは、天文年間十五代晴胤の代に葛西氏が石巻日和山城より、登米寺池城に移った際に、専称寺も石巻鹿妻より登米郡寺池村に移ったためである。

③『石巻市史』は佗詞上人となっているが、佗阿上人の誤りであり、遊行二祖陀阿上人のことである。

④橘俊道・圭室文雄編「庶民信仰の源流～時宗と遊行聖～」所収・史料二、遊行藤沢両上人御歴代系譜（高野修編）参照

⑤版木本の全文が「中世社会と時宗の研究」の五一頁～五二頁にかけて紹介されている。

⑥横浜商科大論集・一四～二

⑦図版No.1の板碑は永仁と読めるようであるが、不確かなので、はずしておく。

⑧私年号については国史大辞典第七巻（吉川弘文館）私年号（千々和到）の項参照。

No. 1

□阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
永仁二年七月
二日

高さ：85cm
幅　：24cm
厚さ：11cm
<1296？>
<1396>

No. 2

（南無）阿弥陀佛

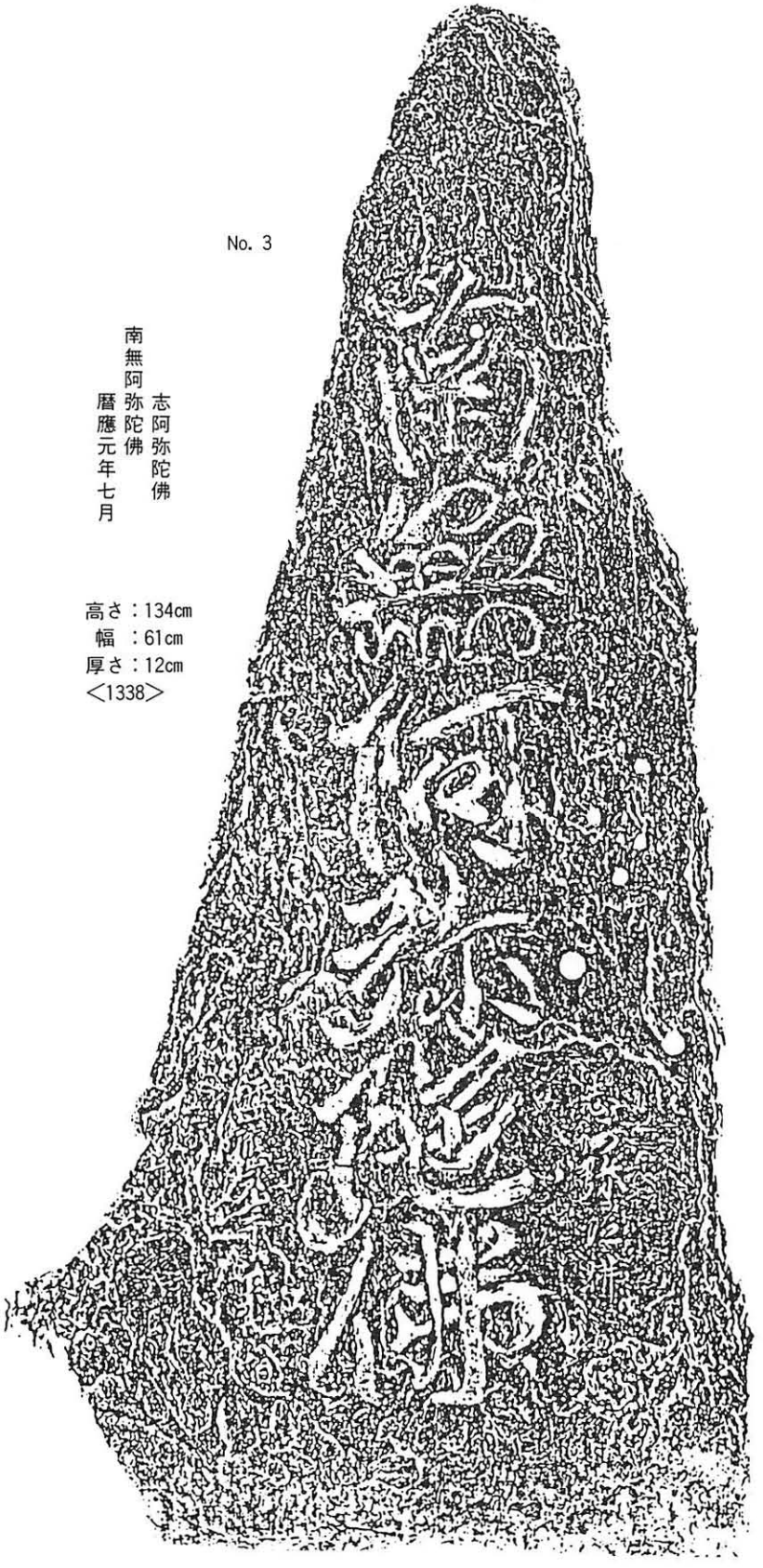
建武四年正月三日
□阿弥陀佛
西阿弥陀佛
元弘元年五月廿日

高さ：120cm
幅　：31cm
厚さ：10cm
<1331>
<1337>

No. 3

南無阿弥陀佛
志阿弥陀佛
暦應元年七月

高さ：134cm
幅　：61cm
厚さ：12cm
<1338>

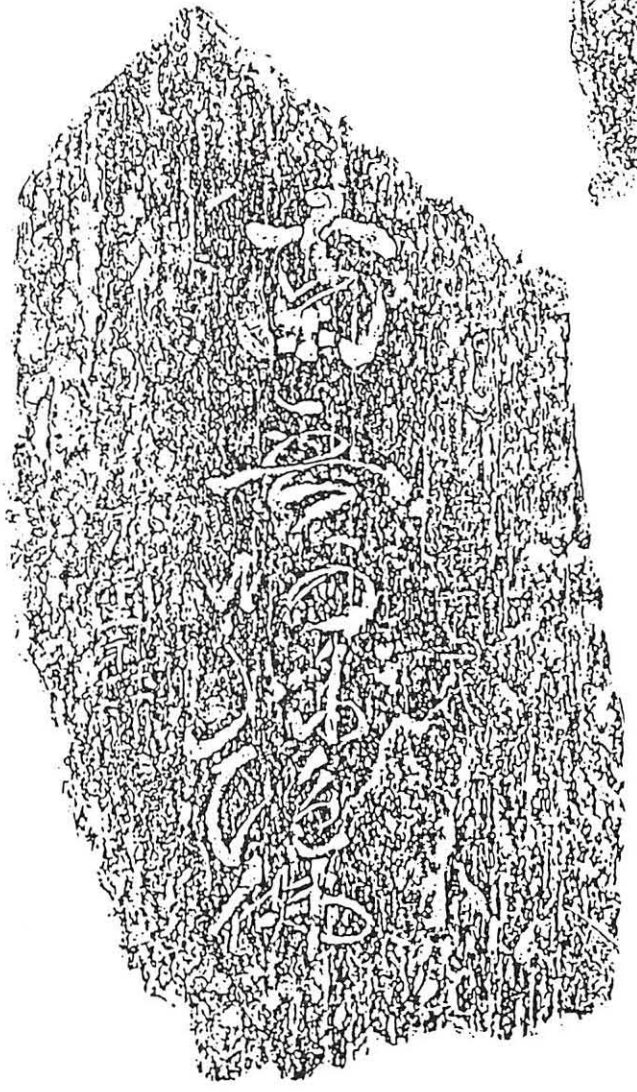


No. 4

一
南無阿弥陀
文和三年

高さ：60cm
幅　：40cm
厚さ：7cm
<1354>

No. 5



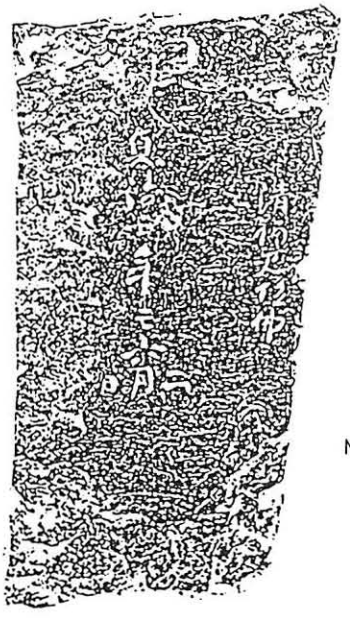
専弥寺二代
南無阿弥陀佛
貞治五年十一月
十六日

高さ：85cm
幅　：45cm
厚さ：7cm
<1366>

No. 6

永阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
貞治六年五月十九日

高さ：127cm
幅　：43cm
厚さ：15cm
<1367>



No. 7

清阿弥陀佛
貞治七年六月二日

高さ：49cm
幅　：26cm
厚さ：6cm
<1368>

No. 8

恵阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
貞治七年三月六日

高さ：66cm
幅　：23cm
厚さ：11cm
<1368>

No. 9

右志者為ー清阿弥陀佛
施主
敬白
（金）大日　応安二年三月八日
乃至法界平等利益□也

高さ：83cm
幅　：29cm
厚さ：10cm
<1369>

No. 10

南無阿弥陀佛　見阿弥陀佛　応安七年七月四日

高さ：108cm
幅　：38cm
厚さ：6cm
<1374>

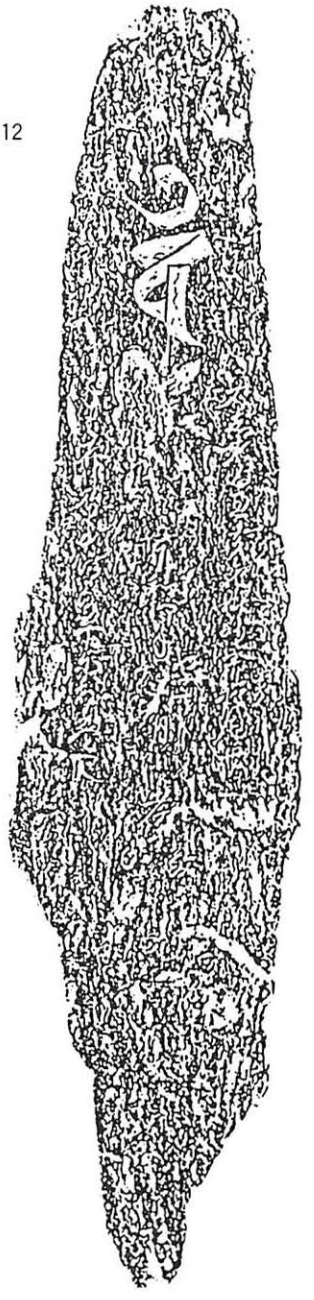
No. 11

南無阿弥陀佛　正阿弥陀佛

永和二年八月三日　時正　初日

高さ：88cm
幅　：26cm
厚さ：9cm
<1376>

No. 12



右志者為過去先妣妙栄禅尼卅三
永和四年　戊
午　孝子　敬
白
（金）大日
年之　乃至法界平等利益也

高さ：100cm
幅　：23cm
厚さ：15cm
<1378>

No. 13

住阿弥陀佛三十三廻
南無阿弥陀佛
康厂二年三月廿四日

高さ：88cm
幅　：24cm
厚さ：12cm
<1380>

No. 14

重阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　三十五日
康暦三年二月廿四日

高さ：103cm
幅　：26cm
厚さ：11cm
<1381>

No. 15

妙阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　三十三年
永徳二年五月廿八日

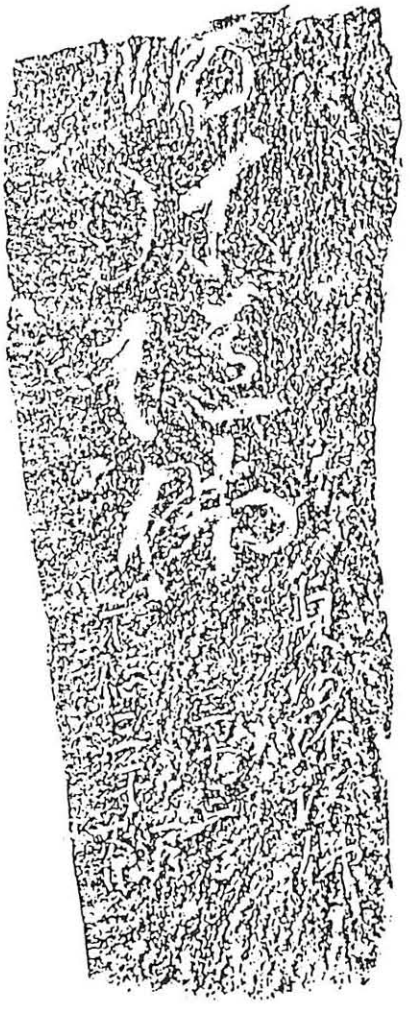
高さ：80cm
幅　：30cm
厚さ：5.5cm
<1382>

No. 16

善阿弥陀佛　逆
修
南無阿弥陀佛
永徳二年七月廿八日

高さ：90cm
幅　：25cm
厚さ：11cm
<1382>

No. 17



貞阿弥陀佛
（南無）阿弥陀佛　三十三年忌
二月
永徳三年
廿□日

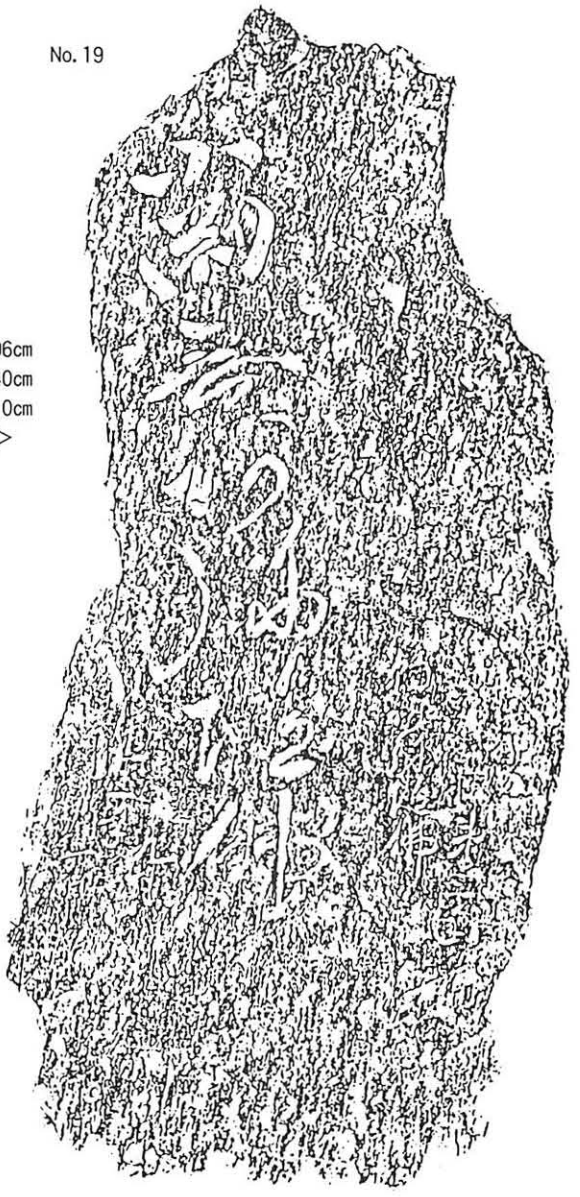
高さ：76cm
幅　：32cm
厚さ：13cm
<1383>

No. 18

蓮阿弥陀佛
（欠）阿弥陀佛
壬
至徳元年　九月十日
五七日

高さ：113cm
幅　：37cm
厚さ：12cm
<1384>

No. 19



第三年
朝阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
九月
明徳三年
六日

高さ：96cm
幅：40cm
厚さ：10cm
<1392>

No. 20

信阿弥陀仏
南無阿弥陀佛
四月
十八日
□永□元

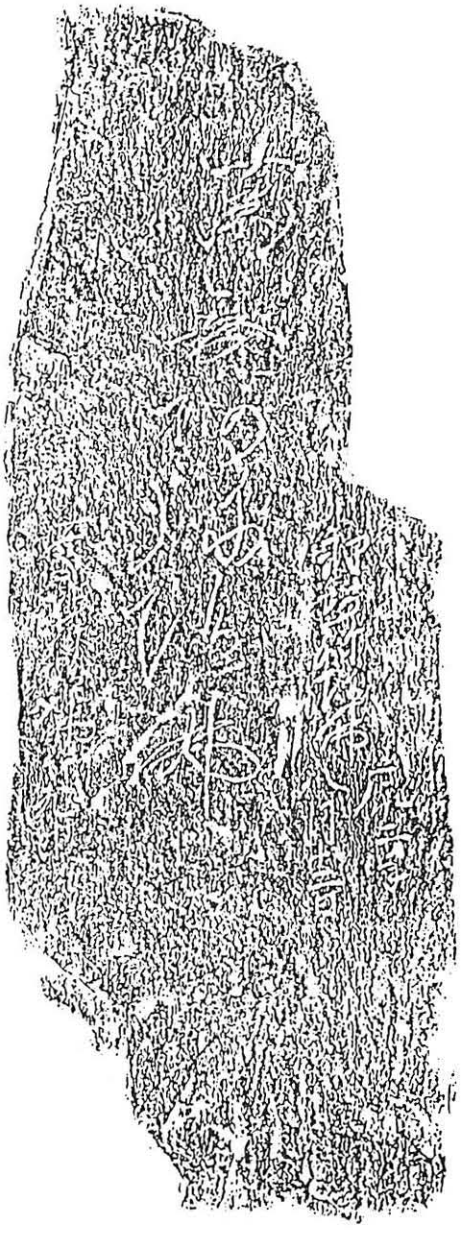
高さ：96cm
幅：18cm
厚さ：15cm
<1394>

No. 21

理阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
慶阿弥陀佛

広永二年
八月十二日
九日

高さ：98cm
幅：39cm
厚さ：12cm
<1395>



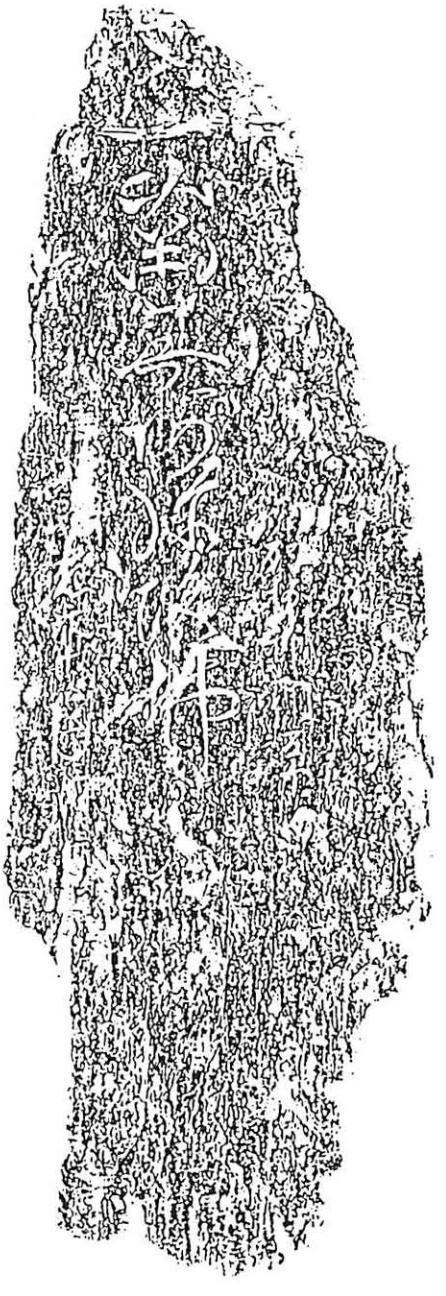
No. 22

蓮阿弥陀佛
無阿弥陀佛

應永三年
九月六日

高さ：83cm
幅：34cm
厚さ：16cm
<1396>

No. 23



列阿禅門　百ケ日
南無阿弥陀佛
應永廿八年三月廿三日

高さ：104cm
幅　：31cm
厚さ：11cm
<1411>

No. 24

智現禅門位
南無阿弥陀佛　三十三年
應永二十一年二月七日

高さ：94cm
幅　：18.5cm
厚さ：12cm
<1414>

No. 25

善阿禅門一周忌
陀佛
廿五年七月十三日

高さ：55cm
幅　：21cm
厚さ：10cm
<1418>

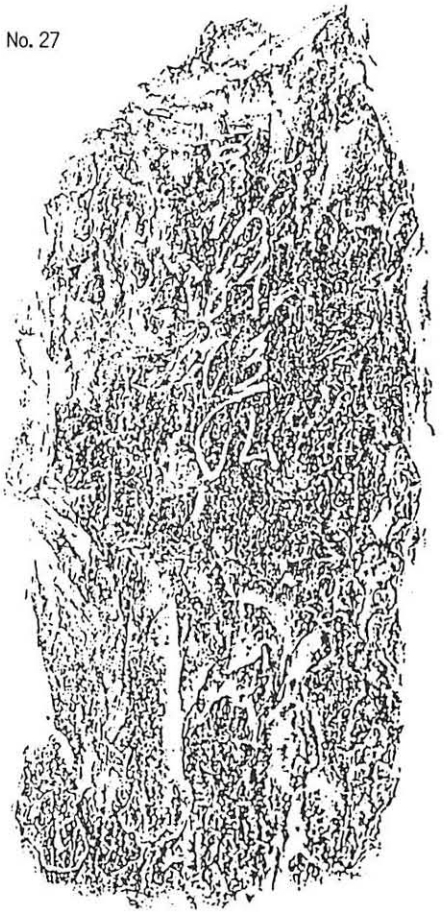
No. 26

南無阿弥陀佛

専称寺四代覚阿弥陀佛位
応永廿七年九月十日

高さ：142cm
幅　：32cm
厚さ：20cm
<1420>

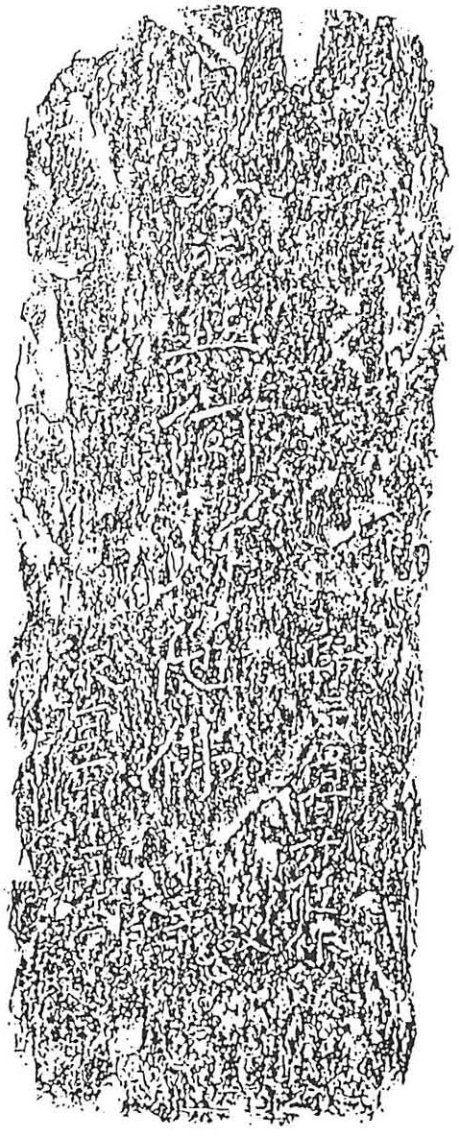
No. 27



善□禅門□□年忌
無阿弥陀仏
応永廿七年八月五日

高さ：72cm
幅　：35cm
厚さ：7.5cm
<1420>

No. 28



歸西□阿弥陀佛
南無阿弥陀佛　□　敬
永享二年十一月十八日　白

高さ：88cm
幅　：30cm
厚さ：4cm
<1430>

No. 29

臨阿弥陀佛

南無阿弥陀佛　文鬼元年七月廿九日

孝子敬白

高さ：94cm
幅　：21cm
厚さ：8cm

No. 30

皈西定阿弥陀仏位

南無阿弥陀佛　□

高さ：78cm
幅　：35cm
厚さ：9cm

No. 31

千阿弥陀仏
南無阿弥陀佛
十一月十四日

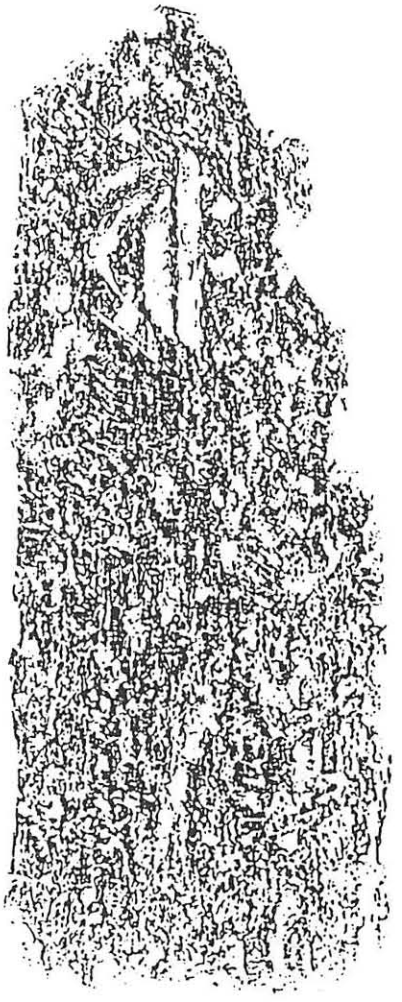
高さ：70cm
幅　：28cm
厚さ：5cm

No. 32

二
□□□□
年
二　二
月
十

高さ：72cm
幅　：20cm
厚さ：9cm

No. 33



（阿弥陀）

高さ：78cm
幅　：28cm
厚さ：12cm

No. 34

（阿弥陀）

右志者□□□□
往生極楽□□□

高さ：90cm
幅　：30cm
厚さ：13cm

No. 35

（阿閦）

高さ：92cm
幅：32cm
厚さ：13cm

No. 37

南無阿

高さ：50cm
幅：33cm
厚さ：5cm

No. 36

南無

高さ：45cm
幅：26cm
厚さ：5.5cm

紙上文化財めぐり

歩いてみませんか ふるさとの文化財

この紙上文化財めぐりもこれで三回目です。今回は、内海橋から湊方面を歩いてみましょう。

出発地点はダックシティ丸光石巻店前です。このデパートメントストアーの前に石住と説明板がたっています。いったい何の石柱と説明板なのでしょうか。

◀中　町

①「中　町」

石柱は「中町」という今は使われなくなった昔の町名を後世に伝えるために当教育委員会が建てたものです。

「中町」は「本町」とならんで北上川西岸にある町のなかでは最も古い町です。江戸時代のなかばには、代官屋敷・八戸藩米蔵・旅籠などが並ぶ繁華街となっていました。現在は当時の面影を偲ぶ建物はありませんが、やはり石巻の繁華街であることには変わりありません。

②旧石巻警察署跡

説明板は「旧石巻警察署跡」です。明治二〇年（一八八八）に門脇本町にあった警察の庁舎が大火で類焼してしまったため、明治二二年に中町に新築移転したものです。建物は明治洋風の建築でした。石巻の近代警察は、明治六年の巡邏屯所の設置がその始まりです。その後明治一〇年に石巻警察署として門脇に庁舎を設置し、前述のように明治二〇年に類焼してしまったのでした。

それでは、いよいよ歩き始めましょう。橋通りに出て右折し、西内海橋を渡ると中瀬です。右手に見える造船所へ曲がる角に説明板があります。

③内　海　橋

説明板は「内海橋」についてのものです。現在の石巻市内には、北上川を横断する橋が四つありますが、内海橋はそのなかで一番はじめに架けられた橋です。「内海橋」という名前は、橋を架けた内海五郎兵衛にちなんでいます。

内海五郎兵衛は稲井水沼の人で、明治一五年（一八八三）に数々の困難を乗り越えて架橋に成功しました。その開通式にあたり当時の宮城県令（県知事）松平正直が内海五郎兵衛の功績を讃えて「内海橋」と命名しました。

このときの橋は木橋で、内海五郎兵衛が通行料を徴しました。明治三三年に橋が県に寄付され、無料で通行できるようになりました。

その後、何度か改築が行われたのですが老朽化したので、昭和六年（一九三一）から八年にかけてコンクリート製の永久橋に架け替えられました。

◀西内海橋

ちょっと寄り道して、説明板のある角を右に曲がり、造船所の方へ歩いてみましょう。道の両側にきれいな公園が広がっているところに出ます。左側の公園内に白い洋風の建物が見えます。

▲旧石巻ハリストス正教会教会堂

④旧石巻ハリストス正教会教会堂

この白い建物は石巻市指定文化財の旧石巻ハリストス正教会教会堂です。明治一三年（一八八〇）に建てられた教会堂で、現存する日本の教会建築のなかでは木造としては一番古い建物です。もともとは千石町に建っていたのですが、老朽化に加え昭和五三年の宮城県沖地震で大きな損害をうけ、解体される運命になったのを石巻建青会と市民有志の努力、市当局の協力によって、ここ中瀬公園に移築復元されたものです。

ハリストス正教というのは、ギリシア正教のことで、明治以降主に東日本に広まったキリスト教の一派です。石巻地方へは明治一〇年頃に入って来て、明治一

三年には教会堂が建てられました。一一人の信徒からなる「兄弟会議」が結成され、建設の大きな力となり、建設費九九九円はすべて信徒からの献金でまかなわれたということです。

木造二階建・総瓦葺で、外壁はしっくい塗りと下見板張になっており、正面の八角形の張り出しはビザンチン様式を日本式の手法であらわしたものです。軒先瓦には十字を入れたものがあります。建物の正面にも同じような十字があります。この肉太の十字は「ふくべ十字」といいます。一階は居室と集会所、二階が礼拝を行うところになっていました。

寄り道はこのくらいにして公園を出ることにしましょう。

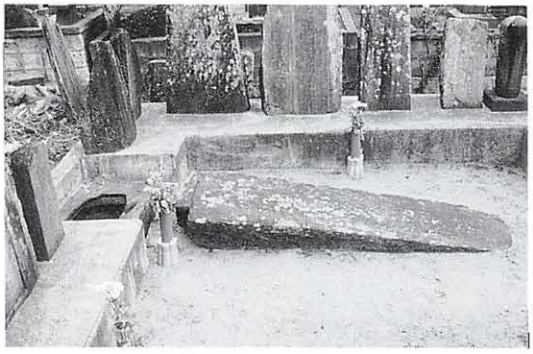
東内海橋を渡ると湊地区に入ります。国道三九八号線沿いに、歩道橋をくぐり右に曲がりましょう。左側に山が見えます。そのなかの五松山には、数々のすばらしい遺品が出土した洞窟遺跡がありますが、残念ながら今は埋め戻してあるので見ることはできません。どんどん歩いて行き、信号を左に曲がり細い道に入ると正面にお寺が見えます。正面のお寺の左側、学校のすぐ裏にも別のお寺があります。正面のお寺が多福院（曹洞宗）、左側のお寺が慈恩院（臨済宗）です。まず、慈恩院から見てみましょう。

⑤長嘯山慈恩院

長嘯山慈恩院は、江戸時代の初め当時の湊村の領主笹町元清が亡き母の冥福を祈るため、松島瑞巌寺の高僧雲居禅師を招いて開山として建てたお寺です。

境内には中世の板碑やお墓のほかに、倒れたままの墓石があります。これが慈恩院の「倒れ墓」です。この「倒れ墓」には次のような話が伝えられています。

笹町元清は、慈恩院ばかりでなく、牧山に長禅寺というお寺も建てました。この長禅寺の住職だったのが栄存法印でした。栄存法印は、豊臣秀吉の家臣で有名な片桐且元の孫で、帰依する人々が門前に市をなすほどでした。この栄存法印に嫉妬したのが笹町元清の嗣子新左衛門重頼です。また、片桐家にゆかりのない土地でなければ決してつかないという「九譜のカエデ」の移植をめぐる栄存法印と笹町重頼との確執、さらに土地の境界争いがあったといいます。それやこれやで栄存法印に対し妬み、恨みのあった笹町重頼は、無実の罪を着せて栄存法印を江島へ島流しにしてしまいました。



◀倒れ墓

江島に流された栄存法印は笹町重頼を呪詛し続け、亡くなりました。その死後、湊村が大火に遭い、笹町家の人々はことごとく変死してしまったのです。「倒れ墓」は重頼の子安頼の墓で、起こすとたたりがあるといわれています。

死後五〇年たって無実であることがわかった栄存法印は許され、そのたたりを鎮めるために牧山に栄存神社が建てられ神として祀られたということです。

いかがですか。これは伝説に過ぎませんが、地元に伝わる話はそれがどんなものであれ、語り継いで行きたいものです。

慈恩院を出て多福院へ行ってみましょう。

◀草刈山板碑群

⑥日輪山多福院

多福院は現在は曹洞宗のお寺ですが、以前は天台宗であったと伝えられています。笹町元清の父胤持が祖霊供養のため、天台宗月光山日輪寺跡に堂宇を復興、元亀元年（一五七〇）鹿妻の法山寺四世盛岩存茂を開山として日輪山多福院と称したのが多福院であるといわれています。

多福院の山門をくぐり、境内に入ってすぐの右側に石碑が並んでいます。これは板碑といい鎌倉時代から戦国時代にかけて建てられた卒塔婆の一種です。多福院の境内には多くの板碑があり市の指定文化財になっています。戦国時代以前の石巻地方についての古文書はほとんど残っていないので、この板碑は中世の石巻を知るための貴重な資料となっています。

本堂の左手奥に石碑の収められた小さなお堂があります。この石碑が「吉野先帝提碑」です。これは後醍醐天皇が死んだときに供養のために造立されたもので、造立したのが誰なのかについては、葛西清貞はじめ色々な説があります。ただ、石碑の文字に手を加えられた跡があるといわれ、様々な憶説をよんでいる石碑です。

この「吉野先帝菩提碑」の右手に、草刈山から移された板碑群があります。この板碑群のなかには葛西当主やその一族の供養碑として建てられたと考えられるものがあります。一つは、興国四年（一三四三）の「蓮阿の碑」と呼ばれる板碑で「蓮阿」は葛西氏の当主葛西清貞かその子良清であるといわれています。もう

ひとつは、興国四年四月二五日の「遠州平清□（文字不明）」の五七日供養碑です。この「遠州平清□」は、葛西当主の甥で北朝側に通じていると疑われて殺された「遠江守清明」であると考えられています。どの碑が「蓮阿の碑」や「遠州平清□」の碑であるかは碑文をよく見てみなさんがさがしてみてください。

本堂の方へ戻しましょう。戻る途中の右側に「中村庄右衛門定春」の墓があります。中村庄右衛門（正衛門）定春は、明石の出身で江戸時代の初め（寛永年間）に伊達家に船大工の棟梁として仕えるようになったといいます。庄右衛門は瀬戸内海の進んだ技術をもって江戸へ直航できる大きな船を造ったといわれています。石巻における造船の祖といえる人でしょう。

庄右衛門の墓に向かって左側にお堂があります。これが大日堂で南北朝時代に造られた大日如来がおさめられています。この大日如来は護良親王の陣中守本尊と伝えられ、六〇年に一度だけ開張する秘仏です。今度の開張は平成一〇年（一九九八）です。

多福院を出て、国道三九八号へ戻り大門崎の方へ歩いて行きましょう。

⑦モクゲンジの群落

ところで、今まで五松山から多福院にかけて歩いて来ましたが、この辺の山から石巻赤中字病院裏山にかけてには市内最大のモクゲンジの群落があります。

モクゲンジは古くから寺の境内などに植えられたといわれるムクロジ科の落葉高木で、日本には自生しない植物だとされ、中国や朝鮮から渡来したものと考えられて来たのですが、日本にもモクゲンジの野生地があることがわかり、石巻市内にも何か所か確認されました。昭和五六年度に行った調査では五松山から石巻赤十字病院の裏山にかけて三か所の生育場所、一一三株の開花株数がありました。七月下旬から八月上旬にかけて鮮やかな黄色い花を咲かせます。みなさんもこの時期にモクゲンジの花を見にきてみてください。

どんどん歩いて行くと大門崎に出ます。大門崎は牧山への登り口の一つですが、その前に一皇子神社を見てみましょう。

◀一皇子神社

⑧一皇子神社

登り口のすぐ左側にある神社が一皇子神社です。一皇子神社は南北朝時代の後醍醐天皇の子護良親王を祀った神社です。護良親王は、自ら武将として鎌倉幕府打倒に活躍し、征夷大将軍に任ぜられ、独自の活動を行っていましたが、結局父から見放され足利方に身柄を渡されて鎌倉に監禁され、そして中先代の乱のときに足利尊氏の弟直義の命により殺されてしまった人です。しかし、護良殺害を命じられた淵辺義博が親王を逃がし、護良親王は葛西氏をたよって奥州へ落ちのび、石巻で余生を送り、正平元年（一三四六）に死んだ、神社背後の塚がその墓であるという話が伝わっています。これも伝承であって歴史的な事実ではありません。

一皇子神社は、県内にほかにいくつかあります。ですから石巻の一皇子神社が特に南朝の皇子と関係があるということは根拠のあることとは思えません。恐らく、一皇子神社という名前から南朝の皇子と結びつけられこのような伝説ができたものと考えられます。

ただ、地元に伝わる話は大切に語り継いで行く必要があります。荒唐無稽な話として捨て去ってはいけません。このような伝説そのものが文化財なのですから。

さて、一皇子神社はこのくらいにして大門崎を見てみましょう。

⑨大門崎

大門崎は牧山南西麓の突出部につけられた地名で、零羊崎神社への登り口の一つです。昔は波打ち際にあった岬であったことからついた地名、あるいは南朝ゆかりの地名であるともいわれています。湊村の江戸時代終わり頃の書上では旧跡の二番目にあげられています。

大門崎にもモクゲンジの群落があり、夏になると黄色い花をつけます。

◀大門崎

さて、ここまでずいぶんと歩いてきました。お疲れになりましたか。まだまだ歩けますか。とりあえずご案内はこの辺で終わりにしたいと思います。

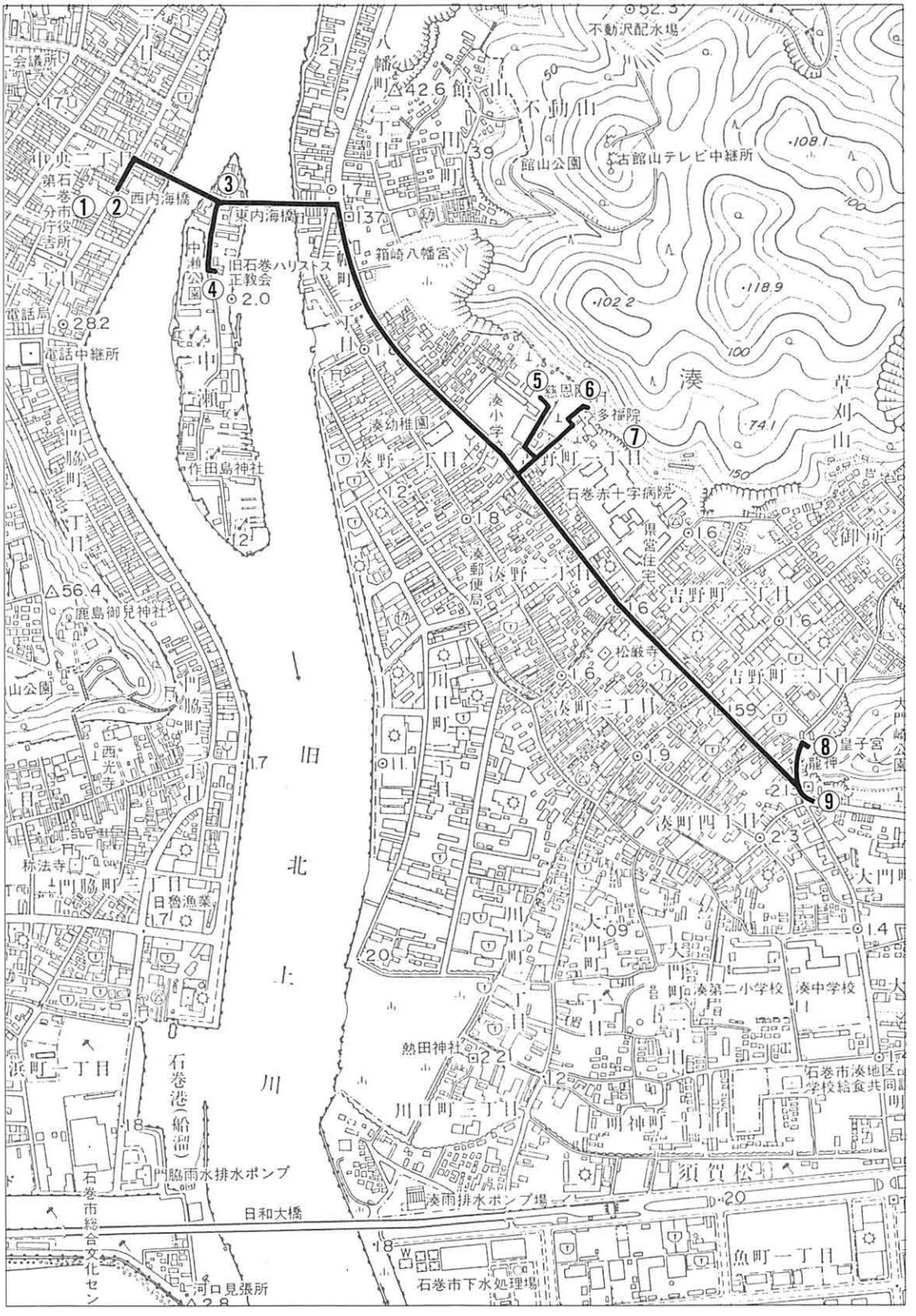
元気のある方は、大門崎から牧山へ歩いて登ってみてください。牧山そのものが貴重な文化財ですから、途中で様々なものを見ることができますよ。

疲れた方は、近くのバス停からバスに乗って戻られたらよいと思います。

みなさんお疲れさまでした。

案内　石巻市教育委員会

紙上文化財めぐり地図


①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
不動沢配水場
不動山
館山公園
古館山テレビ中継所
湊
草刈山
御所
石巻赤十字病院
多福院
湊小学
湊幼稚園
湊郵便局
吉野町一丁目
吉野町二丁目
吉野町三丁目
湊町三丁目
湊町四丁目
松厳寺
皇子宮
龍神
大門町
湊第二小学校
湊中学校
熱田神社
石巻市湊地区学校給食共同調理
須賀松
魚町一丁目
湊雨排水ポンプ場
石巻市下水処理場
日和大橋
河口見張所
石巻港(船溜)
脇雨水排水ポンプ
浜町一丁目
日魯漁業
称法寺
西光寺
鹿島御兒神社
作田島神社
中瀬公園
旧石巻ハリストス正教会
箱崎八幡宮
東内海橋
西内海橋
中央二丁目
第一石巻市役所
会議所
電話局
電話中継所
旧北上川
脇町一丁目
脇町二丁目
脇町三丁目
川口町
川口町三丁目
明神町
大門町
八幡町
館山

平成元年度 文化財めぐり

平成元年度は三回の文化財めぐりを実施しました。平成元年は、松尾芭蕉が奥の細道を旅してからちょうど三〇〇年目なのを記念して「芭蕉・歌枕の地めぐり」を第一回文化財めぐりとして実施し、第二回は本年度新たに指定した文化財を見学する「新指定文化財をたずねて」、第三回は「近代石巻のあゆみをたずねて」として石巻市及び矢本町・鳴瀬町の明治から現代までの文化財の見学を行いました。

第一回文化財めぐり
芭蕉・歌枕の地めぐり

月　日　六月四日（日）
講　師　橋本晶文化財保護委員
参加者　四八人

橋本晶文化財保護委員を講師に迎え、参加者四八人で行われた第一回文化財めぐりは、汗ばむほどの陽気にめぐまれたなかで、芭蕉の足跡をたどりながら、石巻市内の歌枕の地をめぐって芭蕉一宿の地である登米を最終目的地として行われました。

市役所前を出発し、袖のわたり、尾ぶちの牧、おくの海、真野萱原の各歌枕の地を訪れ、『おくの細道』に出てくる「心細き長沼」の河北町合戦谷をとおり、登米町へ着きました。登米町では、河東碧梧桐の筆による「芭蕉翁一宿之跡」碑・登米懐古館・警察資料館（旧登米警察庁舎）を見学し、武家屋敷・土蔵造りの商店が並んだ通りなどを歩きました。残念ながら旧登米尋常小学校は、補修中で見学できませんでした。

第二回文化財めぐり
新指定文化財をたずねて

月　日　一〇月二九日（日）
講　師　橋本晶文化財保護委員
参加者　二二人

第二回文化財めぐりは、平成元年度に新たに指定した仏像を中心に行いました。市役所前から洞源院（仏像）、長谷寺（仏像）、龍泉院（大イチョウ）、日野氏宅（仏像）、吉祥寺（大イチョウ）、旧石巻ハリストス正教会教会堂、寿福寺（鋳銭場職人供養碑）、永巌寺（仏像）を見学しました。

仏像は、いずれも平成元年度に新たに指定されたもので、大イチョウと旧石巻ハリストス正教会教会堂は以前に指定されていたものです。

この日もよい天気に恵まれ、すばらしい文化財をめぐり、参加者にとって文化財保護の大切さをもう一度考えるよい機会となったと思います。

▶第三回文化財めぐり（浜市）

第三回文化財めぐり
近代石巻のあゆみをたずねて

月　日　一一月五日（日）
講　師　石垣宏文化財保護委員
参加者　二三人

本年度の第三回文化財めぐりは、近現代の文化財にスポットライトをあて、現在の石巻に直接つながる各種の文化財を見学しました。矢本町の大塩民俗資料館を皮切りに野蒜築港跡・北上運河・魚市場・青葉神社・石井閘門・旧毛利邸をめぐり、これまで意外と知られていなかった明治以降の石巻についての認識を深めることができたと思います。

▶第一回文化財めぐり（登米）

旧町名表示石柱設置事業
由緒ある町名を後世に
―町名は文化財―

昭和三七年（一九六二）に「住居表示に関する法律」が制定されてから、昔からの由緒ある町名が新しい町名に置きかえられるようになり、旧い町名はそこの住民からも忘れられてしまうような状況になりました。石巻市も例外ではありません。町名は、私達の祖先がその土地とどのようにかかわってきたかを知る重要な手掛かりであり、かけがえのない文化財です。

今、日本各地では、町名も文化財であるという認識を持ち、住居表示を行わない、あるいは、なるべく旧い町名を生かす、さらに失われつつある町名を記録のなかでだけでも保存するなど、何等かの方法で町名を遺す運動が起きつつあります。

石巻市教育委員会では、すでに使われなくなった由緒ある町名を後世に伝えるため、旧い町名とその由来を石に刻んでその地区に建立する事業を昭和五六年度から行って昭和六三年度までに一七本を設置いたしました。本年度は「裏町」と「小野寺横丁」の2本を設置し、これで合計一九本になりました。

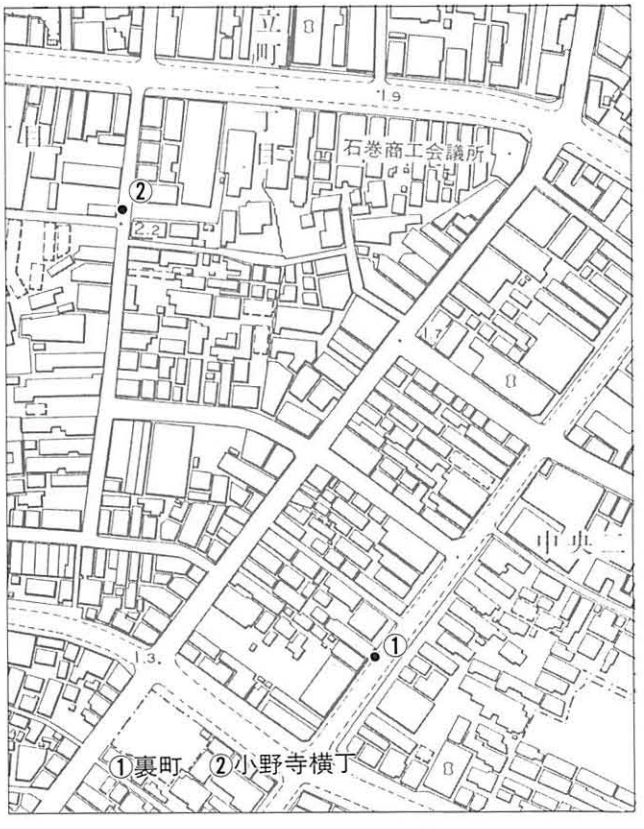
設置にご協力をいただいた方々に厚くお礼申し上げます。

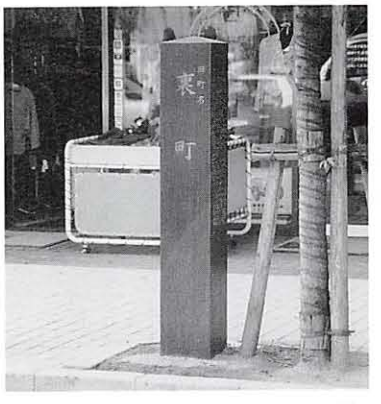
小野寺横丁

寛政年間（一七八九～一八〇一）、当時は草地だったこの周辺を開発して街区形成の基盤づくりに貢献、文政五年（一八二二）に死去した仙台藩士小野寺六郎太夫藤原従継の姓にちなむ町名と伝えられている。「牡鹿大肝煎阿部与兵治書留帳」の中「地附留ノ二」に、「小野寺六郎太夫様　但小野寺六郎平様御嫡子にて大番組御士に御座候」と記す寛政七年（一七九五）五月十四日の報告書が残る。

裏　町

元禄十一年（一六九八）五月成立の「牡鹿郡萬御改書上」中の「裏町　長四町七間（約四四九メートル）、家数弐拾九軒」が文献上における町名の初見。町名の起源には「石巻城の裏手の町」、および「江戸時代初期の町立で、当時の官庁街だった本町→中町の、裏側の町」の二説がある。安永二年（一七七三）三月成立の「牡鹿郡石巻村風土記御用書出」の宿場名中に「裏町四丁七間」とあり、屋敷名中には「裏町屋敷　五拾九軒」と記されている。





▲裏　町
まるみ呉服店前

◀小野横丁
梅屋分店前

文化財標柱・説明板設置事業

ここは遺跡です 工事を計画したら すぐ相談を

木製の白い標柱か黒地に白文字の説明板に「○○跡」あるいは「○○遺跡」などと記されたものを見たことがある方もいらっしゃると思います。遺跡は意外と私達の身近なところにもあるものです。石巻市教育委員会では、こうした遺跡があることをみなさんにお知らせするために標柱や説明板を設置する事業をすすめています。まだ全部の遺跡に設置したわけではありませんが、この標柱や説明板のあるところやここは何かの遺跡であると聞いている場所で工事（住宅建設・排水路の取付・道路工事など）を計画したら、できるだけ早く当教育委員会へ相談し、その指示をうけてください。

とくに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている土地では、文化財保護法にもとづく届出が必要となります。遺跡であるからといって決して工事ができないというわけではありませんので、恐れずに、できるだけ早いうちに相談してください。

本年度は標柱を五本、説明板を一基設置しました。設置にあたってご協力をいただいた関係各位にお礼申し上げます。

石巻市教育委員会

平成二年三月

【説明板】

石巻城跡

文治五年（一一八九）の奥州合戦の恩賞として源頼朝の家人葛西清重は、牡鹿郡ほか数か所の所領を給付されました。以後、天正一八年（一五九〇）に豊臣秀吉によって滅ぼされるまで約四〇〇年の間、牡鹿郡は葛西氏の重要な所領であり、なかでも石巻の日和山は、その居城があったところという伝承が残っています。

しかし、葛西氏の奥州における所領支配の実態は明らかでなく、その居城についてもはっきりしたことはわかりませんでしたが、昭和五八年（一九八三）の発掘調査によって、ここ日和山に大規模な中世城館が確認されました。

城跡が、葛西氏にかかわる有力な城館であることは間違いなく、石巻市のシンボル的な城跡（「石巻城跡」）として長く保存することになりました。

この「石巻城跡」地内で土木工事や住宅建設等を行いたいときは、六〇日以前に石巻市教育委員会へ相談してください。

【標柱】

清水尻遺跡

沖積平野の微高地上にある八世紀後半の墨書が施された須恵器などが出土した遺跡で、石巻地方の古代を知るうえで貴重な遺跡である。

明神山遺跡

標高約四十メートルの丘陵上にあり、ここから須恵器などの遺物が発見されていることから、平安時代の遺跡であろうと考えられる。

釜東古墳

この古墳は七～八世紀に造られたと推定される直径二十メートルの円墳で、以前に行われた発掘調査では周湟は確認できなかったが、市内に残る唯一の保存状態のよい古墳である。

越田台遺跡

この標柱の奥の舌状台地のほぼ全域に遺物の散布が見られ、主に土師器、須恵器が多く、糸切り痕があることから九世紀以降の遺跡と考えられる。

新山崎遺跡（別称三ツ口遺跡）

この遺跡は、古墳時代前期から平安時代中期（約千五百年前～一千年前）に亘って形成された遺跡である。遺跡は、この標柱を中心に東西二百メートル南北約百メートル以上に達し、東側の現在の水田地帯にも及んでいる。石巻地方へ、古墳時代前期にはその文化が伝わっていたことを示す遺跡として貴重である。

◀石巻城跡説明板

石巻市文化財だより（第19号）

平成２年３月30日　印刷
平成２年３月31日　発行

発行：石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目１番１号
電話（0225）95-1111 内線 345

印刷：株式会社 鈴木印刷所
石巻市蛇田新谷地前121
電話（0225）22-4101